



ISOWAは止めません 止まりません。 ISOWA VISION STORY(全4回)

第1回

Prologue

めざすのは、世界一の規模じゃない。世界一社風のいい会社。

社風をよくするための取組みを、一切やめることにしました。

「いつも遅くまで大変だな」「いいえ、楽しいですよ」

社風のいい会社は、楽じゃない。

株式会社 ISOWA 社長の磯輪英之です。私が5年間の総合商社勤務を経て ISOWA に入ったのは1985年のこと。入社後すぐ、ある種の違和感を覚えました。なんだか、受動的な社員が多くないか。みんな、言われたことを一生懸命やるのが仕事だと思っていないか。これは変えなければいけない。そう決意して、社員たちを巻き込んだ様々なイベントや取り組みをスタートさせました。部署の壁を超えて従業員満足向上に取り組むQC活動、会社の風通しをよくするための社員旅行。たくさん研修も実施しました。けれど、状況は変わらなかった。何をやるにしても最初に聞かれるのが、「それは業務ですか?」「残業代は出ますか?」。社員のために始めたことが、まったく社員のためになっていない。一旦、すべてをやめることにしました。

ある社員からの、提案がきっかけでした。「社員同士、会社について自由に話せる場をつくりたいので、場所だけ提供してもらえないでしょうか」。一人の若手から、こんな提案を受けたのです。断る理由はどこにもありません。その代わり、一つだけ条件を付けました。「会社は一切何も言わないから、自分たちの好きなようにやること」。8名の有志が自主的にスタートさせた「定時後ミーティング」は夜遅くまで続きました。ある晩、あんまり遅いので少しのぞいてみたのです。「遅くまで大変だな」。すると、とびつきの笑顔が返ってきました。「いいえ、自分たちがやりたくてやっているの、楽しいですよ。何か報告しろとかレポートを出せとか言われなくてもいいです。家に帰るとどっと疲れが出ますけど(笑)。めざす姿は、これだと思いませんか。会社から押し付けるのではなく、当事者意識のある社員に思い切って任せる。ISOWAの本格的な風土改革が、大きく動きはじめました。

社風は、目に見えません。そして、誰かから与えられるものでもない。福利厚生を整った会社や、定時に帰れる会社がいい会社かという、私はそうは思いません。ISOWAをどんな会社にしたのか。それぞれがどんな仕事をしたのか。社員一人ひとりが自ら考え、努力して、そこに近づけていける。誰にでもチャンスがある。そういう会社、そういう状態こそ、社風のいい会社だと思うのです。「オレがやる」と、当事者意識を持って自ら会社づくりに関わっていく。当然ですが、そうした働き方は楽じゃない。でもその分、味わえる達成感や、やりがいも大きくなるのではないのでしょうか。世界一の社風とはどんなものなのか。きっと、言葉で定義することに意味はありません。社員一人ひとりの働き方が、ISOWAがめざす社風だと思ってください。

【7月号に続く】



ISOWA

<http://www.isowa.co.jp/>

株式会社 ISOWA

— 一段ボールを通じて世界中に夢を —